

ココロセミナー紹介

考えてみませんか? あなたの人権 わたしの人権

ココロセンターでは、人権問題を身近に捉えていただくための講座を年6回開催しています。
今回は、令和2年度前期の講座をご案内します。
あなたの身の回りにある「人権」について学んでみませんか?

スケジュール

第1回 7/19 日 13:30～15:30 会場：福岡市人権啓発センター 研修室(あいれふ8階)

【テーマ】部落差別はなぜ起きるのか ～これからの同和問題～

公益社団法人福岡県人権研究所 理事長 西南女学院大学 教授 **新谷 恭明** さん



第2回 8/22 土 14:00～16:00 会場：福岡市健康づくりサポートセンター「あいれふ」10階 講堂

【テーマ】僕は目で音を聴く ～意外と知らない聴覚障害者の世界～

※「手話通訳」「要約筆記」とも有り
デブ漫画家 **平本 龍之介** さん



第3回 9/26 土 14:00～16:00 会場：福岡市人権啓発センター 研修室(あいれふ8階)

【テーマ】ハンセン病家族からのメッセージ ～思いよ届け!～

ハンセン病家族訴訟原告団 副団長 **黄 光男** さん



申込方法 福岡市人権啓発センターホームページ、メール、ファクス、葉書で、①受講希望回、②住所、③氏名、④電話番号、⑤ファクス番号を記載のうえ、お申込みください。
※ 新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止する場合があります。
※ 会場では、必ず「マスク」を着用してください。

申込み・問い合わせ先

〒810-0073 福岡市中央区舞鶴2丁目5-1 あいれふ8階
福岡市人権啓発センター ココロセミナー担当
TEL 092(717)1237 FAX 092(724)5162
メール jinkenkeihatsu.CAB@city.fukuoka.lg.jp

「ココロセンターだより」No.80 発行：令和2年6月 福岡市人権啓発センター
〒810-0073 福岡市中央区舞鶴2丁目5番1号健康づくりサポートセンター(あいれふ)8階
E-mail:jinkenkeihatsu.CAB@city.fukuoka.lg.jp

ココロセンター 福岡 検索



TEL092(717)1247(人権啓発相談室では人権問題に関する相談及び、研究会や学習内容に関する相談を受け付けています)

法務省委託事業

令和2年6月(夏季号) No.80 福岡市人権啓発センター

CONTENTS「主な内容」

- 不当な差別・偏見・いじめをなくしましょう 1P
- ハンセン病問題を正しく理解するために..... 2P～3P
- 人権啓発推進指導員のコーナー 3P
- ココロセミナー 4P



新型コロナウイルス感染症を理由とした 心ない言動が広がっています

不当な差別・偏見・いじめをなくしましょう

～冷静な行動、助け合い、支え合いが感染症を防ぎます～

福岡市



新型コロナウイルス感染症に関連した 法務大臣メッセージ

新型コロナウイルス感染症に関連して、感染者・濃厚接触者、医療従事者等に対する誤解や偏見に基づく差別は決してあってはなりません。
法務大臣メッセージは、YouTube法務省チャンネル (<https://youtu.be/RYS00qCxo-0>) をご覧ください。

法務省の人権擁護機関では、新型コロナウイルス感染症に関連する不当な差別、偏見、いじめ等の被害に遭った方からの人権相談を受け付けています。困った時は、一人で悩まず、私たちに相談してください。

【電話受付時間】平日午前8時30分～午後5時15分

様々な人権問題についての相談はなんでも

みんなの人権110番 ☎ 0570-003-110

いじめ・虐待(ざやくたい)など子どもの人権問題に関する相談はこちら

子どもの人権110番 ☎ 0120-007-110

家庭内暴力など女性の人権問題に関する相談はこちら

女性の人権ホットライン ☎ 0570-070-810

インターネットでも人権相談を受け付けています

インターネット受付 インターネット人権相談 <https://www.jinken.go.jp/>

1/パソコン、スマートフォン共通

ハンセン病問題を正しく理解するために ~差別や偏見をなくすために~

福岡県人権擁護委員連合会 発行『人権ふくおか』第10号(通巻166号)「そだんのひろば」より

令和元年6月28日、ハンセン病家族国家賠償請求訴訟に対する判決がありました。この訴訟は国が行ったハンセン病患者に対する強制隔離政策によって、社会から極めて厳しい偏見、差別を受け、苦難の人生を余儀なくされたとして、国に対して損害賠償と謝罪広告を求めて熊本地方裁判所に提訴されたものです。国の責任を認めた判決に対して、政府は、「家族のご苦勞をこれ以上長引かせない」として控訴を行わない旨の決定をしました。

私たち法務省の人権擁護機関は、この決定の趣旨を踏まえ、引き続きハンセン病患者・元患者やその家族の方々がおかれていた境遇を踏まえた人権啓発活動の強化に取り組んでいかなければなりません。

そこで、社会に今なお根強く残るハンセン病問題について、偏見や差別をなくすため、正しい知識を身に付けて更なる理解を深めましょう。

Q. ハンセン病はどのような病気ですか。

A. 「らい菌」に感染することでまれに起こる感染症です。

感染し、発病すると手足などの末梢神経がまひを起したり、皮膚に病変が現れますが、「らい菌」は感染力が非常に弱く、日常生活で感染することはほとんどありません。また、仮に感染しても発病することは極めてまれです。

Q. ハンセン病は治る病気なのですか。

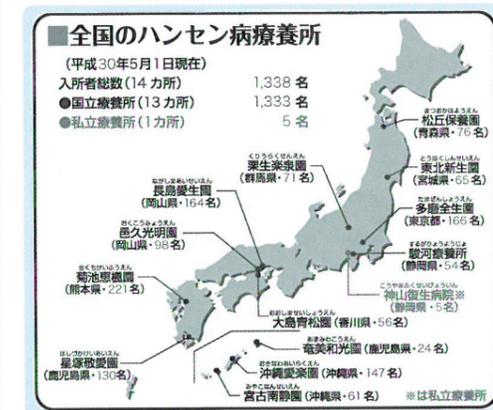
A. はい。治ります。

歴史的には、衛生状態や栄養事情が悪かったために感染症が広まりやすく、「不治の病」として恐れられていた時代もありました。現在は有効な治療薬の確立により治る病気となりましたが、ほかの感染症と同様に、早期発見、早期治療が大切であることはいうまでもありません。

Q. 日本のハンセン病の歴史について教えてください。

A. 古くは「日本書紀」や「今昔物語」にも「らい」の記述があるといわれています。

この病気にかかった患者は、仕事ができなくなり、商家の奥座敷や農家の離れ小屋で、ひっそりと世の中から隠れて暮らしたといわれています。家族に迷惑がかかることを恐れ、放浪の旅に出る「放浪癩」と呼ばれる人々もいました。



明治期に入り、このような患者を放置していることを欧米諸国から非難された明治政府は、明治40年、「癩予防に関する件」という法律を制定し、放浪しているハンセン病患者を療養所に収容して、一般社会から隔離する政策が始まりました。また、昭和6年には、従来の法律を改正する「癩予防法」が制定され、在宅療養者も含めた全てのハンセン病患者を対象とした療養所への強制的な収容が始まりました。各県の衛生当局は患者を捜して収容者数を競うなど、ハンセン病患者をゼロにすることを目的とする官民一体の患者の強制収容運動である「無癩県運動」を推し進めました。この隔離政策は患者の救済も目的としていました。しかし、隔離の際に患者の家を消毒したり、患者を療養所へ収容する際に、いわゆる「お召し列車」という特別列車で輸送するなどし、ハンセン病は伝染力が強く恐ろしい病気という誤った考えが広まり、偏見や差別がより一層助長されたといわれています。

療養所では、退所も外出も許可されないばかりか、農作業、清掃、火葬などの生活全般の作業を強制的に割り当てられていました。また、療養所内の秩序維持のため、所長に裁判を行わずに患者を処罰できる「懲戒検束権」といわれる権限が与えられ、逃亡を企てたり、療養所内の秩序を乱す行為を行った場合には、療養所内に設置された監禁室に収監させられました。さらに、入所者に対する裁判を恒

Q. 隔離政策によってどのようなことが行われたのですか。

A. 非人道的な扱いを受けるなど、患者やその家族の方々は、激しい差別や偏見を受けました。

療養所では、退所も外出も許可されないばかりか、農作業、清掃、火葬などの生活全般の作業を強制的に割り当てられていました。また、療養所内の秩序維持のため、所長に裁判を行わずに患者を処罰できる「懲戒検束権」といわれる権限が与えられ、逃亡を企てたり、療養所内の秩序を乱す行為を行った場合には、療養所内に設置された監禁室に収監させられました。さらに、入所者に対する裁判を恒

常に療養所内に設置した「特別法廷」(いわゆる隔離法廷)で行い、裁判の審理の公正性が保たれていたかについても疑われるような扱いを受けていました。このほか、患者間の結婚は認められていたが、結婚の条件として、男性の断種手術が、妻が妊娠した場合には墮胎手術が非合法で行われました。また、患者本人のみならず、患者の家族の方々も周囲から厳しい差別を受けました。例えば、結婚や就職を拒まれたり、引っ越しを余儀なくされたりするなどの差別がありました。

ハンセン病については、その後、研究が進み、1940年代以降は治療法が確立され、早期に発見し、適切な治療を行えば治すことができる病気となりました。

しかし、昭和28年には、「らい予防法」が制定され、患者を強制的に隔離する基本方針や懲戒規定は残されたままでした。この隔離政策は、「らい予防法の廃止に関する法律」が施行される平成8年まで継続されました。

Q. ハンセン病問題は解決したのですか。

A. いいえ。ハンセン病問題は、現在進行中の人権問題です。

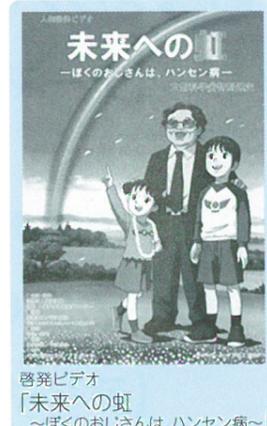
「らい予防法」の廃止後、平成10年、熊本地裁にハンセン病国家賠償請求訴訟が提起されました。平成13年、熊本地裁で国の責任を認める原告勝訴の判決が言い渡され、政府は控訴しませんでした。ここから補償や差別解消に向けた取組が始まることとなります。しかし、判決から2年余りしか経過していない平成15年11月に発生した熊本県内のホテルのハンセン病療養所入所者に対する宿泊拒否によって、誤った認識や偏見が存在していたことが判明しました。すなわち、「社会は、ハンセン病患者やその家族の方々の保護の客体として同情し、理解を示すが、その人たちが抗議の声を上げ、立ち上ろうとすると、激しく反発し、非難する。しかし、それが差別や偏見であることに気付いていない。」このような差別が浮き彫りになったという指摘があります。

このように今なお根強く残る偏見や差別の解消を更に推し進めるため、平成21年4月には、「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が施行されました。

今、療養所入所者の平均年齢は85歳を超え、その方々が受けた過去のつらい歴史を直接学ぶことができる機会も日一日と減っていく現状にあります。

ハンセン病問題の歴史を知ることやハンセン病患者や回復者、その家族がおかれていた境遇を一人一人見つめ直し、それを踏まえた人権啓発活動の強化に取り組んでいかなければなりません。

なお、ハンセン病隔離政策で差別を受けた元患者家族に対し、最大180万円を支給する補償法と名誉回復を図る改正ハンセン病問題基本法が11月15日の参議院本会議で全会一致で可決、成立しました。



人権啓発推進指導員のコーナー

人の関わり方が変わる

息子夫婦に待望の第1子が産まれた。息子も、すぐに駆けつけて我が子に触れ、妻と喜びを分かち合いたかったろうが、それができないらしい。新型コロナウイルス感染防止対策の一環で、母子を守るために、同居の家族でも産院の中に入れないのである。さらに、退院後も、すぐ近くに住んでいるのに、里帰りする妻子とばかりは接触しないという。「スマホで会えるから」と割り切っていた息子だったが、やるせない気持ちは想像できた。

私の母が入所している介護施設も面会禁止になった。それで、母宛に手紙を書き、一週間分の着替えとともに届けることにした。施設の玄関先で言付けると、担当の介護士さんは笑顔浮かべながら私との距離をとった。そして、さらに後ろに下がりながら「お母様は元気にしているので安心してください。」と、母の近況を知らせてくれた。

私たちは今、人に会わないことや人から離れることを、ふつうに行うようになった。その結果、残念に思うことも多い。しかし、これらの行為は、言うまでもなく「人の命を守るために会わない」のであり、「人を大切に思うからこそ離れる」のである。

「コロナ」によって、人の関わり方が変わっていく。何を、どのように受け入れ、日常としていくのか、私たち一人ひとりが考えていく今後の課題だ。(大戸)

目が開かれた名言、

古今東西の文豪の言葉から生きるヒントを探るコーナー、「絶望名言」が面白い。ステイホームで昼夜が逆転した大型連休中、たまたま聴いたNHK「ラジオ深夜便」で知った。その日は、阿部公房の作品からの引用だった。

<弱者への愛にはいつだって殺意が込められている> ドキッとすると、「殺意」を「排除」に言い換えれば、こんな文意になるようだ。「弱者を憐れみながらも排除したい願望」。弱者は少数派で、強者は社会に適応している多数派のこと。人は誰でも強者願望があり、社会に適応できない弱者を苛立つ存在、輪を乱す者として排除したくなる。確かに…ある。

<人類の歴史は弱者の生存権の拡張だった。……弱者をいかに多く取り込むかが文明の尺度であった> 生きづらさや不便を抱える弱者は、その弱点を補うための発明や発見で社会を変革してきた。だから、弱者をお荷物として排除したら、社会の進歩を止めることになる。なるほど…この展開には目が開かれた。こんな言い方もできそうだ。「マイノリティの人たちを簡単に切り捨てる社会は結局、長続きしないよ」。

解説は自らも難病で絶望を味わったという、文学紹介者・頭木弘樹さん。ユーチューブでも再掲され、過去の放送分は本になっていから静かなブームらしい。(蔵本)